

問うて云く、後五百歳は汝一人に限らず。何ぞ殊に之を喜悅せしむるや。答えて云く、法華經の第四に云く、「如来の現在すら猶お怨嫉多し、況んや滅度の後をや」文。天台大師云く、「何に況や未來をや、理化し難きに在り」文。妙樂大師云く、「理在難化とは、此の理を明かすことは意衆生の化し難きを知らしむるに在り」文。智度法師云く、「俗に良薬口に苦しと言うが如く、此の經は五乘の異執を廢して一極の玄宗を立つ。故に凡を斥け聖を呵し、大を排い小を破る。乃至、此の如きの徒悉く留難を為す」等云云。傳教大師云く、「代を語れば則ち像の終り末の始め、地を尋ぬれば唐の東羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。經に云く、猶多怨嫉況滅度後と。此の言良に以有るなり」等云云。此の傳教大師の筆跡は其の時に當るに似たれども意は當時を指すなり。「正・像稍過ぎ已りて末法太だ近きに有り」の釈は心有るかな。經に云く、「惡魔・魔民、諸天竜・夜叉、鳩槃荼等、其の便を得るなり」云云。言う所の「等」とは、此の經に又云く、「若しは夜叉、若しは羅刹、若しは餓鬼、若しは富單那、若しは吉遮、若しは毘陀羅、若しは健駄、若しは烏摩勒伽、若しは阿跋摩羅、若しは夜叉吉遮、若しは人吉遮」等云云。此の文の如きは、先生に四味・三教、乃至、外道・人天等の法を持得して、今生に惡魔・諸天・諸人等の身を受けたる者の、円実の行者を見聞して留難を至すべき由を説くなり。

疑いて云く、正・像の二時を末法に相對するに、時と機と共に正・像は殊に勝るゝなり。何ぞ其の時機を捨てて偏に當時を指すや。答えて云く、仏意測り難し。予、未だ之を得ざれども試みに一義を案ず。小乘經を以て之を勘うるに、正法千年は教・行・証の三つ具に之を備う。像法千年には教・行のみ有り